

異本『とけいの本地（時計本字）』

— 奥浄瑠璃本の変容 —

井 上 勝 志

従来知られていた仮題『都誓願寺如来之御本地』（東京都立図書館（加賀文庫）・東京大学総合図書館蔵）と同板乍ら、「時計の起原^{はじまり}」という外題を付した六段本（鱗形屋板）、あるいは、これらとは別板の『都誓願寺如来之御本地』（鱗形屋板）が奥州の地へ供給され、伝播していたであろうことをかつて述べた。

右の過程で奥浄瑠璃本にも触れるところがあつたが、新たに奥浄瑠璃の一本（架蔵）を確認できた。その書肆事項を次に摘記する。

装丁 二七・二cm×一五・〇cm。

表紙 無地（裏表紙には罫を引く）。

題簽 なし。表紙左上方に「とけいの本地」、その左右に「時計本字」

「斗傾本字」と墨書（図版参照）。

内題 なし。

段数 六段。

丁数 二十八丁。

行数 七行。

節譜・区切 なし。

識語

表紙に「文化六己巳歳正月下旬写之者也」、裏表紙見返しに「新城村峯屋敷／林之助」とある（図版参照）。

その内容は、内題がなく、「とけいの本地」と外題があるように、別板『都誓願寺如来之御本地』ではなく、「時計の起原^{はじまり}」という外題を持つ六段本の本文と、初段から五段目までは対応を見せる。一例を挙げると、次の如くである（五段目）。

（六）くもいのよそに見し人も、同じ舟になれ衣、身はかけろふの立なく、きへはやみづのあはち嶋、あかし塩やのうら過て、いくよねさめをすまの関、兵こに入ば西のみや、うみこしに、くろみでもの、みへたるは、住吉四しやの神やしろ、つ、く名所は吹上のうらつたへ、そなたと斗打なかめ

（奥）雲みのよそニミし人も、同じ舟二なれ衣、みハかけろふの立無く、きへばや水のあわ嶋、あかし塩や浦過て、いくよねさめすまの関、兵庫二入ハ今ハはや、住吉四社の神やしろ、続ク名所ニ吹上のうらつたへ、そなたと斗り打詠

奥浄瑠璃本には、六段本の傍線部の詞章がなく、波線部のような語句となっている。その他はほぼ同文である。五段目までは、基本的にこのような状況である。

しかし、六段目は状況が異なる。六段本の六段目の展開を示すと、次のようになる。

- ・ けしこく、来朝し、正住と対面。
- ・ 親子の名乗りを拒まれたけしこく、しばらく日本に逗留。
- ・ 天武天皇、天智天皇の本尊建立のため正住を召し、宣旨。
- ・ けしこく、参内し、本尊建立を懇望。
- ・ 帝、親子で建立することを宣旨。
- ・ 親子、所を隔てて本尊建立。
- ・ 供養の庭で親子の本尊を押し合わせる。
- ・ 帝、親子に本領安堵。
- ・ もろこしへ使いを立て、夫人を迎え、親子三人、栄華に榮えた。

奥浄瑠璃本も基本的な展開としては右の通りであるが、六段目全体に渡ってまったくの別文となっている。五段目までを現存六段本に拠って書写してきたとするならば、六段目だけが異質である。この「改変」は、林之助なる人物の書写段階でなされたとは考えにくい。それは五段目の本文に乱れがあることによる。

六段本では、けしこくが父であるけんもんしの形見の巻物を示し乍ら、父を訪ねて日本へ渡海することを懇請する場面で、母の

夫人は結局それを許すという展開で、次のようにある。

有時に、若君、母のふ人に近付、いかに申さん母上様、父のかたみのまき物に、生は、なんせんふ州、氏は、ふちはらの少将正住、同名は、けんもんしと書れたり、……諸せん、此身をうしないで、ふかきなけきをかけ申さん

母は、余りのかなしさに、何と申そ、けしこくよ、さ程に思ひ切ならば、さらは、いとまゑさすへし、……

奥浄瑠璃本では、次に掲げるように、けしこくの台詞（右の傍線部）が脱落し、夫人の台詞へと転換しているため、当然文意は通じない。

時に、若きみ、母のふ人に近付、いかに申さん母うへさま、父のかたみのまき物二、生は、何と申そ、けしこくよ、さ程二思ひ切るならハ、さらは、暇ヲ得さすへし、……

これに続いて、夫人の嘆き↓名残の盃↓けしこく出船、という展開は両者に対応するのであるが、右の脱落相当部分が奥浄瑠璃本では六段本の次の箇所（☆）に挿入され、こちらも意味不明な文脈となっている。

（一八）……是かわかれか、かなしやと、声を上げてそさけはる、

女方立は立へたて、是は、舟ちの御門出、去とては、いまはしし、こなたへ（☆）入らせ給へとて、おくにおし入奉るあらいたはしや、けしこくは、……

（奥）……是かわかれか、かなしさと、声を上げてそ歎かる、

女房立ハたち寄りて、是ハ、舟ちの御門出、さりとてハ、い

たはしし、こなたえ、なんせんふ州、氏ハ、藤原少将正住、

同名ハ、けんもんしと書れたり、……諸せん、此身をうしな
いて、深きなけきをかけ申さん

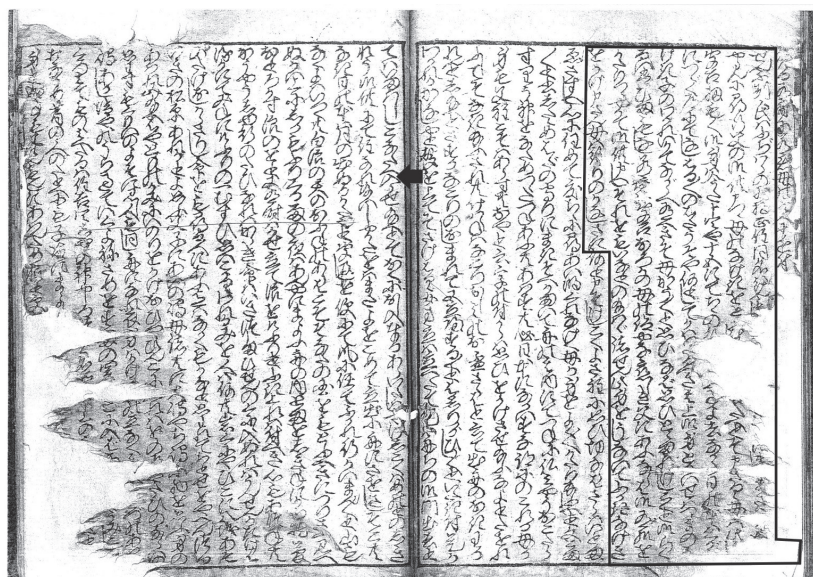
母ハ、余りのかなしさ二、御入候へと、おく二押入れ奉る

荒いたわしや、けしこくハ、……

図版に示すように、六段本の七ウ初行末から九行目までの線で
囲った部分が八オの初行の◀部分に挿入される形となっている。
この体裁の手本を座右にして目移りしたという可能性は考えにく
く、また、たまたま手にした六段本に乱丁があったとしても、右
のような詞章前後は起こらないであろう。すなわち、この部分に
ついて、林之助なる人物は、文章の繋がり疑問を抱きつつも、
手本のままに書写したのではなからうか。少なくとも、意図した
「編集」だとは思えない。とすれば、何らかの事情による「誤り」
も含めて、手本を忠実に書写しようという態度が見て取られる。
これは、六段目のみを文章を改変しつつ書写するという態度と
は相容れないと思われるのである。つまり、林之助なる人物は「改
変」された六段目本文を持つ写本（転写本）をもとに忠実に書写
したのであらうと考えられる。

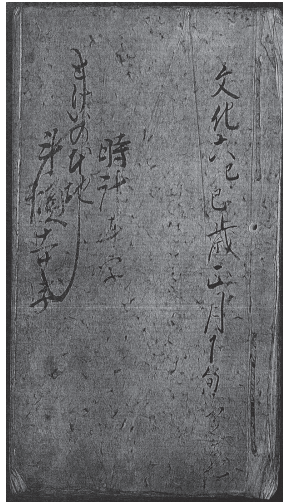
識語にある「新城村」とは、青森県東津軽郡にあった村のこと
であろうか。「時計の起原^{はじまり}」という外題を付した六段本が奥州へ
伝播していたことは、本書の外題からも間違いないことであらう。
江戸から仙台あたりへ供給された六段本が津軽の地まで伝播し、
書写を繰り返される過程で変容を見た一例として本書を捉えるこ

六段本七ウ・八オ

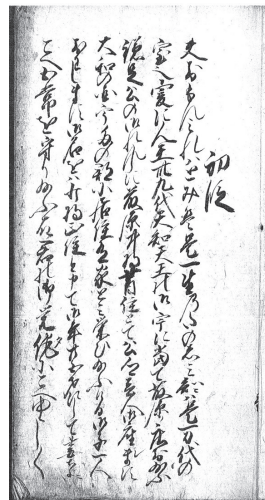


とができよう。「誓願寺如来之御本地」と題すればこそ、六段本ですら、「昔より、せいぐわんしの本尊を、かすかのさくと申事、明神の御ほんち、くわんおん菩薩地そう也、おや子の人の御すかた、二菩薩とおかむゆへ、かすかの作とは申也」云々と語るのであり、「とけいの本地」と題する以上、本尊建立を、誓願寺如来の縁起として語るのではなく、けんもんしとけしこく、および母の夫人の、親子の名乗り・再会への展開として描いたのであるうか、あるいは、その逆か、六段目のみの「改変」の意図が那邊にあったのかは不明である。その全文を示して参考に供する次第である。

『とけいの本地（時計本字）』表紙



『とけいの本地（時計本字）』初丁オ



『とけいの本地（時計本字）』終丁ウ・裏表紙見返し



六段目

扱茂其後、けし国丸わ、山城や宇多の郡ヲ聞尋、いそくに程無ク宇多の宿所ニなりけれハ、正すミの御宿所ニ御座かと、といければ、番の者共承、三藏良と答ける、案内こうて内ニ入、と有御座かしこまり、扱それかしわ、もろこし百済国よりも渡ししけしこくと申者ニ候、父ヲ尋テ是迄参り候事、扱、わが父上ハ藤原正少正住と申奉る御人ニてまします、もろこしニてハ(20ウ)

けんもんし中納言とけんぜられ候、わが母と相なれたもふ、其子ニて候得ハ、春々尋、是迄参り、親子と御名乗被下へし、是ハわれ母上よりの御書上ニて候と、正住ニ奉れハ、庄住、かの文ヲ受取たまへてひらへて御覽まします、成程無人か筆のすさミニ相違ヒ無、すれハ、なんじハもろこし人之事なれば、われハ日本人、そこつ二名乗ハかのふまし、ついニハなりの知しヘキぞ、はや／＼帰レ、けしこくと、わざとうしろニけんお見せ、相の(21オ)障子ヲはたと立、御ねの所ニ入たもふ

けしこく、はつとおとろき、扱、父上と申御人ヲおかミ申シ、嬉しくハ候得ハ、親子と名乗あらされば、もろこしニ立帰り、此事ヲ母上ニ何とや語り申べし、あまつさい母上よりの頼ミたるかへもなし、あらうらめしの次第やと、声ヲ上てゾなきたもふ

けし国、おつるなミたおおしと、め、のふいがニ父上様、親子となのりたまわれと、声ヲ上てそなきたもふ

正住、きこしめし、はや／＼上宿ニ帰られよと、(21ウ)

声ヲあら、け仰ける、けしこく丸、千万つきて御座ヲた、せたま

へける、なく／＼上宿ニ急きたもふ

かくて、上宿ニ成けれハ、月日ヲおくらせたまへける

是レハ扱置、御門ニ而ハ、具行大人指あつはらせたま得、君なんてんニしゆつきよ有、春の花ヲおしみ、しゆヲ作り、哥ヲよミ、さま／＼勇子おわします

扱、みかとのりんけんニハ、かたかた承、扱、天ちく天王様の御本尊、今夕なくして候得ハ、此度作仏仕る、此度の作仏ヲたれニ申つけん、(22オ)

かたかたいかにとの隣けんなる

時の寛白す、ミ出、たれ／＼と申とも、藤原正少中納言正住ニ仰つけられ候らへと申上れハ、御門永ふん有、然は、中納言めせとの上イ成る、中納言、何事やらんと、急キ御門ニいそがる、かくて、御門ニ成けれハ、つゝしんてかしこまる、中納言正住ト

ひろふし奉レバ、おくよりのせんじニハ、中納言なるが、珍らしや、何チよぶ事弁義ニあらず、天ちく天王様の御本尊作仏ニ仕る、なんじニ仰つけられ候程ニ、急キきそふお(22ウ)

仕れ、正住いがにとりんけんなる、正住はつと承、こわ有難の御事、三度拝シ奉り、御前ヲ罷り立、わがやヲ指て帰らる、

是レハ扱置、扱、此事ヲけし国丸、耳ニそきこへける、けしこく心ニ思ふよふ、扱、それがしハ日本ニわたりしせうこふニ、何とそ其作仏ヲ作りたき物とおもへつ、上宿ヲ立出、御門ヲ指て急かる、

急く二程無クはや御門ニなれば、御しらすニかしこまり、菅人の

童子、扱、それがしハ、もろこし白歲国よりの渡ししけし国丸と申物にて候か、(23オ)

父ヲ尋ねて此国ニきたれとも、親子の名乗モなく、むねんなきならもろこしニ歸り申也、扱、承われば、何か作仏ヲ作らせたもふと承る、けしこくが日本ニ渡しし其せうこふニ、其作仏ヲそれがしニ仰つけられ候らば、難有奉つる事、つまひらがニ申あく、御門永ふんましまして、何ニもろこしよりの渡ししけしこく丸とな、なんじの父ハたれ人にて候とのりんけんなる、けしこく丸承扱、わが父ハ日本にてハ藤原正少正住と申人ニ而(23ウ)

まします、もろこしニ渡り、其名おけんもんし大納言とけんぜらる、わが母と相なれたもふ、其子なれば、はるく尋て是迄参り候得ハ、親子の名のりもたまわらず、むねんニ存奉ると申上れば、なにし中納言名乗て悦こばんせんと有ければ、君の御前はばかり至極とて、御なのりたまわらすと申上ければ、御門永ふんましまして、それ中納言めせとの御状成る

中納言、何事やらんと急ギ御門ニさんたへす、つしんでがし(24オ)こまり、正住とひろふシ奉れば、奥よりのせんじニ、正住成ルが珍らしや、何ちよぶ事別義ニあらず、扱此度、もろこしよりもわたりしけしこく丸と申者、なんしが子にて候とて、はるく尋てきたれ共親子ノ名乗も無く、むねんてもろこしニ歸る、其しやうこうニ、此度の作仏ヲそれがしニ仰つけられ候らへと申也、是レハイが二とのりんけんなる、正住承り、扱、然ハ、けし国か、其作仏ヲ作らたへとヨな、然ハ、足よりしたわ右作仏ヲ(24ウ)

半身ツ、分けて作るべし、少シ茂ちがい有ならば、親子のなのりハと二いがニ、あんのんニテハもろこしニがへしまし、けしこくいがとていがりける、さらはと斗り二いとま申而御前ヲ罷たつ東ハ中納言^大正住、西ハけしこく丸と森影ヲへたて、出入ヲきひしくきんせられ、中納言な、扱、此度の作仏ハ十一面觀世音ヲつくらんとおほしめし、御絵つニ写させたまへと、まん中よりもしつかと打、左のかたしわわれハ作る也、右ハ形チハけしこくかとニ(25オ)

いがニと、まん中よりも小刀ノ先にてさらりとわけ、右ノ方ノ御絵、ツヲ火中ニ入させたもふ、さらはと斗りニ心の内にてくわん年申、きさミたち、扱、けし国ハ父上ハ何ながつくらせたもふかな、ゆめにもミへぬ事成れば、父の遜の小刀ヲ手ニ取りたまへて、おしいた、き、なくより外の事ハなし

扱、日本の御神もわれおふひんとおほすなら、夢ニもしらせてたまわれと、毎日くなミたと共ニふし拜ミ、なくより外のことわなし(25ウ)

扱、ふしきやな、父上のうつのミ、さいつちのおとたぐく、森かけニひ、き、山このつけと聞へける、父上ハ十一面觀世音ヲ作らせたもふそや、御せいの高サハ壹丈六尺六寸ニ、旨の割ひた三枚盈、らほつの数々こまやがニ、鼻の長サハいたる迄、つける如ニきこへける

右之御かたちお作るべし、左ハ父上あそはせたもふ程ニ、けし国丸、さらはと斗りニ、絵つニあそはせたまへけり、心の内にて寛

念申、昼夜まどろむひまもなく、(26オ)

作らせたまへば、も早作仏も作り出二けり

父上ハ今タニ作らせたまへける、なんなく仏も出けれハ、明る朝五ツの上刻ニ、仏ヲ引合せ候程ニ、こくけんたがわす、身仏持参仕まつれと、使者ヲそたて二けり、けし国はつと斗り二こらへける

はや余日ニもなりければ、五ツ上刻、東方よりも、父正住作りし仏ヲ取持せ、出たもふ、西方より、けしこく丸やがて仏ヲ取持せ、御しらすニこそハ出たもふ、さらばと斗りニおし合せ、(26ウ)見て有れば、うぬけ程モチがい有らはこそ、仏ハ金切がつきと入くまば、おしたて見たもふニ、十一面観世音とあらわれたもふ、天より廿五のほさつ来公し奉り、今日ひちりきのおと高ク、うつ金ニ至る迄、御がいけんこそ罷なり、さらば、親子の名のりお仕まつれと、きん中よりも玉の盃たまわりける、親子の人々ニハ有難キ次第やと、おしいた、き、親子の名のり聞へける、重て三大仕まつれば、御いとまおたまわれば、(27オ)

子ハ難有次第やと、三度拝し奉り、御前ヲ罷たち、宇多の宿所ニ帰らる、

かくて、宿所ニなりければ、けし国丸、もろこしニまします母上ニ、返シモ早此事おしらせ申さんと、やかて使者舟おそたて二ける、かのふね何風ニもあわづして、急ク二程無ク早もろこしニそ着二けり

ていこのかんとり、けしこくの方よりの御書状ヲ奉まつれば、母

上御覽ましまして、あらうれしの次第かな、さらば、(27ウ)

われも日本へ渡るべしと、右ノ舟ニさおさして、出させたもふニ、おせやかんとり、ほニ声懸て、早もろこしの地ヲはなれ、日本の塩ニそ入二ける、なんなくなんはの浦ニ舟ヲつけ、くがニ上らせたまへける、山城や宇多の宿所ニと急かる、

急ク二程なく正住の御やからニなりけれハ、けしこく丸、御前ニ罷立出、只今御出しますがと、御手ヲ取てれん中内ニと入二ける

正住、御覽ましまして、扱、ぶにんなるが、珍らしや、(28オ)われなき跡ニ此子ヲもうけ、成人而是まで尋ねてきたる、嬉しやな、母上も始おわりの事の葉ヲこまやがニかたらせたまへけるけしこく丸、御盃お取出シ、二親の親ニ奉る、御悦ハかきり無シ、夫婦の人々、にせのちゑんむすはせたまへ、千秋万歳、萬万成、中々申斗りハなかりけり 終 (28ウ)

注

(1) 「奥浄瑠璃本の依拠本としての六段本——佐藤理作(利作)の旧蔵書から——」(「神女大國文」第二十七号、

二〇一六年三月)

「都誓願寺如来之御本地」紹介と翻刻」(神戸女子大学古典芸能研究センター紀要)10号、二〇一六年六月)

「奥浄瑠璃の語り」(神戸女子大学 古典芸能研究センター紀要)14号、二〇二〇年六月)